

■ピカソ美化学研究所

# アフターコロナの 新たな価値提案に 着手

迅速なコロナ対策品の生産で  
新たな絆が生まれた

ピカソ美化学研究所ならではの価値提案が新たなステージを迎えている。同社は、既存の化粧品受注生産に加え、日本国内で新型コロナウイルス流行の兆しが現れるよりも早い段階の2月末より指定医薬部外品の消毒用ハンドジェルの製造に着手。兵庫県内の自治体に寄贈したほか、店頭ルートでのドラッグストア、量販店、バラエティショップ向けだけではなく、通信販売会社での販売および取引先の顧客へのインセンティブ商品など、現在約80社から1500万本を受注。国内では神戸工場と横

浜工場およびタイ・バンコク工場において24時間フル稼働で生産し、順次供給している。今後も、新型コロナウイルス対策品のバリエーションを広げ、新たな生活様式に対応した新しい価値提案を進めていく考えだ。八木伸夫社長は次のように説明する。

「ピカソ美化学研究所はBtoBビジネスがメインですが、販路を持つていませんが、幅広い流通チャネルのお得意先さまと取引があります。そうしたお客さまにお力添えいただき、当社がお得意先さまそれぞれの特徴に合わせた製品を製造。それを多くの消費者の方に提供いただくことを通じ、感染予防に貢献していきたいと考えて

社長」という。

## 生活様式の変化を見越し コロナ対策品の幅を広げる

本国内の容器メーカーに対し先行発注し、消毒用ハンドジェルの生産に十分な容量を確保している。日本では医療用が最優先されていたこともあり、調達がタイトになっていたが、タイをはじめとした海外でも高品質なアルコールの調達を実現。安定的な生産で、国内の感染拡大抑止に貢献している。

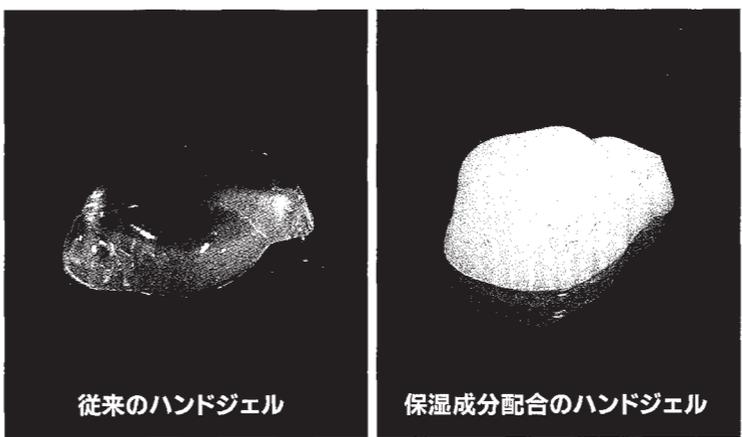
こうした取り組みはタイでも同様。日本の化粧品を現地に流通する関連会社のジャパンコスメマーケティングを通じ、タイに出店しているマツモトキヨシ、アットコスメストア、ドン・キホーテの店頭に消毒用ハンドジェルを流通。これらは生産こそバンコク工場だが、日本で製造しているのと同様の処方設計、デザインを採用した高品質の製品となっており、現地

の感染予防に貢献している。消毒用ハンドジェルの製造により、「従来のお取引先さまだけではなく、新しいお客さまからの引き合いもいただいております。新たな絆づくりにもつながっている」（八木

ピカソ美化学研究所では、今回生産した消毒用ハンドジェルに加え、手指消毒以外にも使える除菌ミストや、唾液によるPCR検査の増加を見越したマウスウォッシュなどの口腔関連商材の開発を進め、取引先への提案を強化していく考えだ。また、秋冬の乾燥する時期にニーズが高まるハンドクリームでもコロナ対応した指定医薬部外品のハンドクリームといった付加価値の高い製品を秋口ごろから生産を開始する。

もちろん、こうしたコロナ対策品は、指定医薬部外品の製造許可を取得している同社ならではの高品質な製品であることは言うまでもない。例えば手指以外にも使える除菌ミストは、現在店頭で販売されている製品は雑貨類に分類されるものがほとんど。雑貨品は、指定医薬部外品などと異なり規制の対象外であるため、除菌効果などの基準もあいまいで、安全性に

います。そのために何とか原料や容器、アルコールを集め、製造現場から本部まで、全社員が一丸となって指定医薬部外品の消毒用ハンドジェルを生産し続けています」



従来のハンドジェル

保湿成分配合のハンドジェル

に、64 vol%の消毒用アルコールを採用。アルコールの殺菌力と塩化ベンゼトニウムを持続的な抗菌作用を両立している。

ピカソ美化学研究所がこれほど早く新型コロナウイルス対策品の製造に着手できたのは、指定医薬部外品消毒用ハンドジェルの製造認可をすでに取得していたことに加え、これまで構築してきたグローバル体制と、顧客の販売機会最大化にこだわったODMの提案力によるところが大きい。

例えば、製品を量産するうえで原料と容器の調達が重要になるが、同社ではこれまで原料や資材のグローバル購買を進めており、その仕組みが確立している。取引先の販売機会の最大化のために、不測の事態が起きても供給体制を維持し、顧客の要望する納期通りに納品するためだ。

今回の消毒用ハンドジェルの製造においてもこうしたグローバルでの購買体制構築が生きている。具体的には、2月の段階でタイや韓国の現地容器メーカー、日系容器メーカーの海外事業所および日改良といえる。

「アフターコロナの生活様式の変化を見通し、化粧品ODMならではの視点で消費者の琴線に響く情緒的な価値を付加した感染予防に有効な製品をトータルでそろえてお客さまに提案する。それと同時に、これまで通り機能性化粧品のODM活動も進めていきます。今後はこの両輪でお取引先さまの販売機会の最大化に貢献していくつもりです」（八木社長）

新型コロナウイルス禍という未曾有の事態を経験し、今後は化粧品の消費行動が変化するのは明らかだ。常にマスクを着用しなければならぬ状況で、リップ関連のポイントメイクが落ち込むとの見方が一般的になる一方で、ウェブ会議など新たなコミュニケーション方法が増えるなかでこれまでないメイクニーズも確実に生まれてくるはず。そうした大きな変化のなかで、今回、コロナ対策品の製造へのスピーディな対応を実現したピカソ美化学研究所の存在は確実に高まった。化粧品の委託製造先として強い味方になるはずだ。☆